概要

活動地域：北海道函館市
活動期間：2015 年 4 月～2018 年 3 月
活動体制：工学院大学　野澤研究室
　　星研究室
　　関西大学　岡研究室
　　芝浦工業大学　桑田研究室
　　千葉大学　秋田研究室
　　新潟大学　松井研究室

活動キーワード：中心市街地　郊外住宅地
　　歴史的市街地　空地活用
　　法制度、住まい方

2016 年度活動メンバー

M1：島田 泰仁／富田 俊介　B4：安池 美里　B3：井上 恵／泉 知花

研究テーマ

地方都市における
新しい住環境価値を考える

活動経緯

2015 年度に本プロジェクトはスタートしたが、2016 年からは科研費の助成を受け、5 大学 6 研究室のプロジェクトとなり、再始動した。

これまで住環境価値は、利便性や快適性、安全性等の観点から、場所に依らず一律に捉えられてきた。これは、新しく開発される居住地を評価するには効果的であったが、規制市街地の住環境を考える時には、居住者の感覚にそぐわないことも少なくない。

人口減少・超高齢社会となった今日、右肩上がりの社会成長を前提として考えられていた住環境は、新たな価値観を持って捉え直されるべき時を迎えている。すでに、近い将来、既成市街地の中のある部分は、変化し続けるニーズに対応しきれなくなったり、あるいは行政の財政的な厳しさ・困窮を理由としてそのサービスが低下している。特に地方都市はそれが顕著に現れているの。そこで、代表的な地方都市である函館市を対象として、本研究は活動している。

活動対象地概要

函館市の人口は、国勢調査によると、昭和 55 年の 345,165 人をピークに減少しはじめ、平成 22 年では 279,127 人となっていて、現在も減少を続けている。北海道では、札幌市の 1,942,648 人（平成 26 年 10 月 1 日）、旭川市の 347,450 人（平成 26 年 10 月 1 日）に次いで、3 番目となっている。ちなみに、昭和 10 年の国勢調査までは、札幌市をおさえて道内一の人口であった。

一方、観光地として人気があり、ブランド総合研究所による地域ブランド調査では、3 年連続全国で最も魅力的な市区町村となっており、興味深い都市といえる。

昨年度までの活動内容

昨年度が現地調査がメインであり、11 月に 5 日間、函館に訪れた。函館の観光名所である、函館山や中心市街地の現状を把握した。また、2016 年 3 月に開業する北海道新幹線の駅である新函館北斗駅や郊外にも足を運び、現状を把握した。現地調査までは、現地調査に向け、文献調査やデータ作成を行い、函館の状況を確認している。

2016 年度の活動内容

2016 年度の函館プロジェクトの活動としては大きく分けて 2 点の調査を行った。まず、1 点目に国勢調査等の既存データから調査を行った。そして、11 月には現地調査を行った。

【文献調査・データ作成】

文献調査では、最初に国勢調査等の既存のデータから函館市の現状の把握を行った。その内容としては、町丁目別の人口、世帯及び年齢 3 区分や DID の動態、地価等の調査した。図1は 1980 年から 2010 年の町丁目別人口の増減を表したものとなっている。人口の面から見てみると、中心市街地では人口減少が続いているが、一部地域においては増加していることが分かった。郊外地域では、現在も急激な人口増加が見られる地域がいくつかあることが分かった。今回の調査から、現地調査で調査を取り上げる対象地を中心市街地、郊外住宅地から絞り、8つのまちを選んだ。

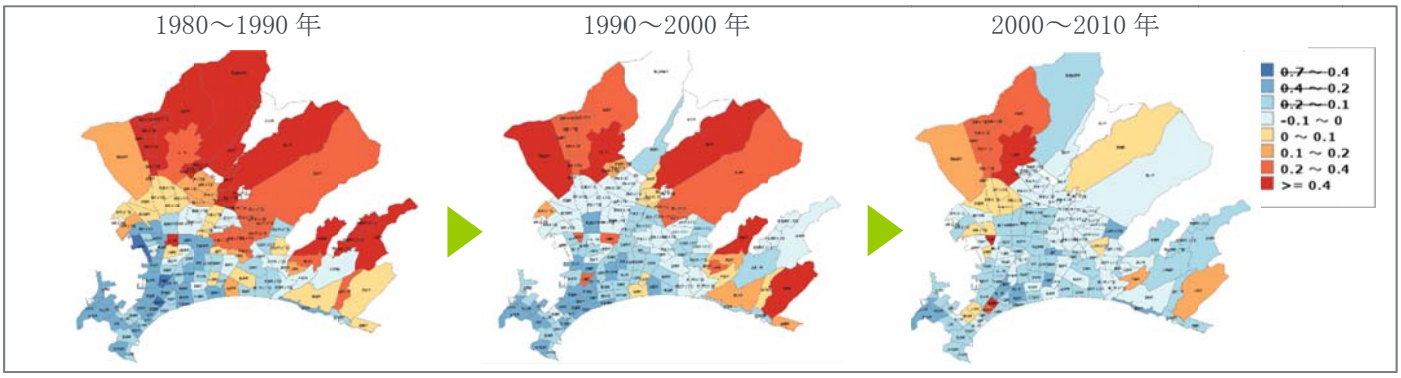

図1　函館市町丁目別人口増減率

【現地調査】

今年度も 11 月に現地調査を行った。17 日から 22 日までの 5 泊 6 日で現地調査及び市役所の方へのヒアリング調査を行った。調査内容と日程は以下の通りである。

1 日目：塩ラーメンを味わう。
2 日目：市役所でヒアリング。
3 日目：車で対象地視察。
4 日目：対象地調査 1 日目。
5 日目：対象地調査 2 日目。
6 日目：観光地散策。

写真 1　基坂

写真 2　旭岡団地

■対象地調査

それぞれの対象地での現状を把握すべく、対象地の調査を行った。調査内容は、事前に観点を共有しておき、どのような印象なのか、周辺環境の状況について、気になる点などをピックアップし、調査シートとしてまとめた。

図 2　現地調査シート

※本プロジェクトは、JSPS 科研費「地方都市における居住の場・住まい方に求める新たな住環境価値のあり方に関する研究」（基盤研究(C)、研究代表者：野澤　康、課題番号 JP16K06658）の助成を受けて行っています。